

安楽寺だより

第49号

紙面内容

- 2面 報恩講法要でございさつ
- 3面 本山東本願寺報恩講に参拝
- 4面 日本仏教史(補足) 蓮如上人5

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
 電話 〇五二(八四一)二六〇六

あけましておめでとございませう
 お釈迦さまのお話が続きます

第8回 お釈迦さまの初説法

お釈迦さまの教えを伝える仏典には、次のよ
 うなお言葉があります。

『わたくしのこころの解脱は不動である。こ
 れが最後の生存である。もはや再生することは
 ない』

『こころの解脱』とは、欲望に振り回されな



いこころを確立
 したことであり
 ます。このこころ
 を持つてこそ、人
 はいかなる状況
 にあるうとも真
 の自分を見出し
 つつ生きること
 が出来るし、それ
 が不死に繋がる
 生き方であると
 見出されました。

当時のインドで受け入れられていた「輪廻転
 生」(りんねてんしょう)の考え方の枠組みの
 中に「これがわたくしの最後の生であり、再
 び生まれ変わり再生することはありません」
 と表現されたものに違いありません。

お釈迦さまは、しばらくお悟りの地(ブッ
 ダガヤー)に留まった後、道を西北にとつて
 ガンジス川を渡り、カーシー国のヴィラーナ
 シー(ペナレス)の市街地東北数キロにある
 サールナート(鹿野苑)に行かれました。

お釈迦さまは、ここであつたの修行仲間五
 人と再会し、彼らに自らが悟つた法を説き聞
 かせました。

『この世に生まれてきた限り、人間は老い、
 痛み、汚れ、死ぬものである。何故か？ す
 べて因縁によつて生まれ、因縁によつて移ろ
 い変わつていくものである』

『今のままの姿でいたいとどんなに願つて
 みても、所詮それは無理なのである。にもか
 かわらず、ある人は、その無理なことにしが
 かにしたのです。

みつぎあくせくし・悶え・悩み・愚かな迷信
 にすがりついでいる。またほかの人々は、今
 だけの瞬間的な快樂に身をゆだねている。し
 かし、これらはどちらも悩みや煩いを深める
 だけでしかない』

『人間が本当の幸福に到達する道は、あら
 ゆるものに対する欲望を捨て、自分自身に対
 する執着さえも捨てて、静かに清らかに生き
 ることである』

六人での議論は白熱しました。朝になると
 三人が托鉢に出て、他の三人は残つて修行に
 励みました。何日か経つた頃、その中のひと
 りコーンダンニヤ(喬陳如)が目覚め、他の
 四人も次々と目覚めて、遂に皆、お釈迦さま
 と同じ法に目覚めました。この鹿野苑での最
 初の説法を『初転法輪』といいます。

目覚めた人(仏・ブツダ) 真実の教え(法・
 ダルマ) 教えに感動し歩み始めた人の集い
 (僧・サンガ) という仏教で最も大切な三つ
 の宝(三宝)に皈依する人が世にでること
 になりました。仏教徒として生きる決意を明ら
 かにしたのです。

「仏法僧」に皈依する人の誕生

報恩講を勤めました

昨年十一月十三日安楽寺本堂に於いて、報恩講法要をお勤めしました。コロナ感染症が始まって三回目の報恩講でしたが、大勢のご門徒のみなさまにご参詣をいただきました。正信偈・念仏和讃をご唱和した後、荒山信師（昭和区・恵林寺住職）のご法話をお聞きしました。

「報恩講は、九十年のご生涯を、お念仏の教えに出遇っていかれた親鸞聖人を偲び、聖人の教えを聴聞し、阿弥陀さまから願われている私たち自身を頭かにする法要です。



「願われている身と気付く」

「先ほど住職さんのお孫さんが、今年八月本山でお得度を受けられ『お念仏の教えを聞いていきます』とごあいさつされました。新たに仏弟子となられた人のことを、新発意（おしんぼつち）と言いならわしています。

聖人は九歳の春、京都青蓮院で

『明日ありとおもうこころのあだ桜夜半に嵐の吹かぬものは』

（美しく咲く桜の花も、一夜の嵐で散ってしまいます。その桜の花よりもはかないものが、私たちのいのちではないでしょうか。明日といわずに今すぐここで出家させてください）

と、歌を詠まれ、得度を受けられたといわれています。

「報恩講を勤めるのは、お念仏を申してくださいとされた聖人そしてご先祖の方々に出会い直すことであり、いろいろな人に支えてもらい、今を生きていることを確かめさせていただくことだと思います。

『この世は自分を探しに来たところ、この世は自分を見つげに来たところ』と、陶芸家の河井寛次郎さんは申しておられます。自分は探すもの・見



つけるものであり、これまでの喜びや悲しみは決して無駄ではなかったと、過去の自分に光が当たることが、自分を見つげることだと思えます。報恩講は、自分を見つげるための法要です。

「正信偈に『本願名号正定業』と申されています。阿弥陀さまは『わが名を呼ぶものは必ずたすけよう、浄土世界に生まれさせよう』とよびかけられています。私にその願いがかけられていることに気付くことが、報恩講を勤めることの意義だと思えます。

親鸞聖人慶讃法要



御影堂門前高札

安楽寺だより

本山東本願寺では、今年三月二十五日より四月二十九日まで、宗祖親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八百年慶讃法要が勤まります。慶讃テーマ「南無阿弥陀仏・人と生まれたことの意味をたずねていこう」のもと、名古屋別院をはじめ全国各地で、お待ち受け法要や真宗講座などが開催されてまいりました。

「慶讃」とは、私たちが親鸞聖人や先達のご生涯に思いを馳せ、その人と自らのご縁の深さ、またその人と出遇えたことの意味や慶びを顕わすことです。

聖人の教えを聞いて、改めて自分のところに受けとめ直し、私にまで届けられた念仏の教えを慶び讃える御仏事として勤めたいと願っております。

二十二組では、二回に分かれて慶讃法要の団体参拝を実施いたします。安楽寺は、四月十九日に参拝いたします。後日ご案内しますので、宜しくお願い申し上げます。

本山報恩講に参拝しました



昨年十一月二十六日、二十四名の皆様と本山東本願寺報恩講に参拝いたしました。早朝に安楽寺会館にお集まりいただき、バスで京都に向かいました。予定どおり到着し、御影堂前の白州にて写真撮影（写真左）をした後、入堂しました。堂内正面の参拝席は、全国からお集まりの皆様とご一緒でした。一年前の参拝の時より少し暖かく感じられ、

御堂衆の響き渡る声明を聞いて静かにお参りしました。

その後、昼食会場の京都宇治の平等院にバスで移動しました。境内は風もなく、木々の紅葉も見ごろの時期でしたので、拝観や買物を楽しむ多くの観光客が来られていました。

今回の団体参拝にご参加いただきました皆様には、心よりお礼申し上げます。

上の段の記事に述べましたように今年四月には、親鸞聖人の慶讃法要がございます。

団体参拝のご案内は改めて致しますので、ご予定いただきますよう、宜しくお願いいたします

仏教豆知識

第四十九回



日本仏教史

補足 蓮如上人5

⑨ 平座での布教

蓮如上人の布教は、戦国時代の農民の現実を正確に把握し、農民こそ依拠すべき社会層であるとの自覚に基づいて、惣村に講や組を組織することに力を尽くしました。そして、吉崎御坊に参詣する門徒には、田舎の人々であらうと本願寺常住の者であらうと差別することなく平座にて接待しました。それは親鸞聖人の「御同朋御同行」の教えを実践するものでした。

しかし、吉崎御坊に何千何万の人々が参詣する状況は、当時の守護大名との対立を孕んでいました。

⑩ 門徒の行動をいましめる

そこで、上人は次の御文を出されています。『そもそも当流の他力信心のおもむきをよく聴聞して決定せしむるひとこれあらば、その信心のとほりをもて心底におさめおきて、他宗・他人に対して沙汰すべからず。また路

次・大道われわれの在所なんどにても、あらわにはひとをもはばからず、これを讃嘆すべからず。つぎには、守護・地頭方にむきても、われは信心をえたりといひて粗略の儀なく、いよいよ公事をまたくすべし。また諸神・諸仏・菩薩をもおろそかにすべからず。これみな南無阿弥陀仏の六字のうちにこもれるがゆえなり。これすなわち当流にさだむるところの掟のおもむきなりとこころうべきものなり』(二帖第六通) 文明六年(一四七四年)二月十七日

上人は門徒の反社会的行動を厳しく戒めておられます。

このような時、同年三月二十八日、吉崎御坊は失火に見舞われ、ほとんどの建物が焼失しました。その一年余後、上人は北陸での直接布教をあきらめざるを得ず、若狭の国(福井県)を経て河内の国(大阪府)に下向されました。



昨年来、ロシアによるウクライナ侵攻が連日テレビ等で報道され、市民の惨状に言葉がありません▼その影響で物価高やエネルギー不足の不安が拡がっています。日本政府は、この危機に乗じて防衛費倍増・敵基地攻撃能力の保有によって戦争を抑止する政策に舵を切ろうとしています▼これは戦後七十七年、憲法九条を守り専守防衛に徹し、他国に軍事的脅威を与えるような軍事大国にならないという平和外交の根本的転換になります▼一九四五年(昭和二十年)の敗戦まで侵略戦争で被害を与えたアジア・太平洋諸国の人々の信頼が得られなければ、いわゆる「平和のための戦争」という八十年前の「悪夢の道」を辿ることになってしまわないかを、立ち止まって冷静に議論する時だと思えます。▼戦争は人間の起こす最大の罪悪です。戦争を始めるのも人間、戦争を止めるのも人間です。『国豊民安、兵戈無用』(仏説無量寿経)のお釈迦さまの教えを今一度しっかりと受けとめるときです。